3つの魂

ラグサット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３つの魂

【Ｎコード】
Ｎ４６２９Ｉ

【作者名】
ラグサット

【あらすじ】
急に２人の魂が自分の体に宿ってしまった！
なにやらこの２人敵におわれているらしい。
戦え？えええ！なにこの急展開！？（涙）
これはそんな３人が送るバトル物語。

プロローグ

俺の名前は杉山　慎一、現在高一の１５歳である。
どこにでもある小説のように特に執筆するようなことはなく、過ぎ行く時間に則ってただただ平凡に暮らしていた。
・・・・そりゃあ俺だって一度は思った、てゆうか今でもおもっているさ。こんな平凡な世界なんかより学校に転校生がきて、そいつが実は魔法が使えて、それが俺にばれて、なんだかんだでまきこまれ、俺も魔法が使えるようになって・・・なんてことになれる世界の方がいいにきまってる。
でも実際にはなにもなかった。過ぎ行く時間なんぞ今となっては早いもので、気がつくと小学校も終わり、中学校にいったら何か起こるかも、なんてのも受験と言う名の現実にたたき起こされた。
そうして気づくと、自宅に近い公立高校に合格。友達とも離れ、自分の高校に通っている元同じ学校メンバーは２０人しかいなくなった。
高校は忙しく、そうこうしているうちに非日常的妄想も考えなくなっていた。
・・・えっ？
なんでじゃあこんなことをかたってるんだって？
それはＧＷにおきたことがあまりにも非日常だからだよ。

これはバトル物語であり、主人公たるこの男に非日常がふりかかる。
それはかぎりなくありえないことかもしれない。しかしいかに０．０００００００１％といえど１千万人、つまり日本中に１０人はいる計算になる。その白羽の矢がたまたまこの男に当たっただけの、ただそれだけのお話。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？
初心者なので全然うまくないけど、どうか見守っていてください。
コメントもよろしくお願いします。

第一章≪ハジマリ≫

「おーい。慎一！」
その言葉に俺は振り向く。
「ああ。そろそろ下校か。」
俺は中1からの友達の柏木　鷹久とともに毎日下校している。鷹久は俺よりはるかに頭がよく、性格や顔立ちもかっこいい俺の自慢の友達である。俺は自分で言うのもなんだけれど、あまり自分から友達を作らないタイプなのだが、鷹久は机に突っ伏していた俺に話しかけてくれ、気づいたら友達になっていた。こいつはそうやって中学でもたくさん友達をつくっていたっけな・・・。そうこう話をしているうちに学校をぬけた。
「心配だったけど同じ中学のやつがクラスにいたのは嬉しかったな。」
「ああ。それも友達でよかったぜ」
今日は入学式だった。クラスには当然かどうかは知らないが全然同じ中学のやつは全然いなく、鷹久と喋った事も一切ない女子一人だった。まあ、みんなそうなのだろし、鷹久は友達がすぐできるので、そいつと仲良くなれるさ、などと考える俺はどうなのだろう？と、そんなことを考えていながら俺は鷹久と別れ、自宅に戻るための帰路を歩いていると、自宅の目の前に一人の女の子がつったっていた。ってゆうか、俺のことをがん見していた。年は6，7かな？
「お兄さんが、慎一と言う人ですか？」
いや、お前誰だよ。そう言いそうになったが、ぐっとこらえて小さい子用の声で言った。
「君は僕になんのようかな？」
そうすると女の子は、はい。と元気に言った。
「隣の家のお姉ちゃんが、この家にもうすぐ帰ってくる慎一って人に話を聞くといいよ。と言われまして。」

くっ！愛華め、余計な仕事を増やしやがって！つーか、話？
「話って何かな？」
そう聞くと女の子は鞄から一枚の紙を見せた。なんか、宝の地図っぽい感じだが、地図がこの地域の形に似ている。そしてその地図にはXマークがある。なるほど・・・話が読めたぜ。
「宝の地図ですよ。」
そう女の子が微笑みながら言う。やっべ、まじで興奮してきた。昔からこういうのやってみたかったんだよ。地面から掘ったら宝がでてくるみたいなやつ。
「それが場所は分かったんですけど硬くて掘れないんです。どうか手伝ってくださいませんか。」
両親は２０時ぐらいに帰ってくるだろうから間に合うか。
「いいよ。楽しそうだしね。どこか案内してくれないかな。」
そう言うと女の子はとても喜んだ。近所のスーパーの近くの草むらの中に宝はあるのだという。俺がシャベルと、自転車の鍵を用意すると、遅かれながら自己紹介をしてくれた。つうかよく俺は会った事もない女の子と喋っていたな。
「私の名前は由紀です。」
俺は自転車に女の子こと由紀ちゃんを乗せほかにもいろんな話をした。小学校５年であることやら、ひいおじいさんの倉庫からこの地図を見つけたことなど。そうこう話をしているうちに目的地の草むらに着いた。
「そこに目印があるでしょ。そこを掘ってください。」
確かにそこには小さな旗が立ててあった。
「じゃ、掘るよ。」
由紀ちゃんも真剣に掘る場所を見ている。現在午後６時半ちょい前、人通りは０、聞こえるのは風の音だけ。硬いと言うので力をいれて掘ったが、そんなに硬くはなかった。１０分ぐらい掘っただろうか、というときにシャベルにガキンと硬いものにぶつかった音がした。
「ついにきましたか！」

由紀ちゃんは目を輝かせて言う。俺もめちゃくちゃうれしく、掘るスピードを速めた。そして、宝の箱の全貌が見えた。青銅と鉄で作られて、ところどころ錆びている。俺がもちあげると、由紀ちゃんは開けていいですよ。とジェスチャーする。俺は震える手で宝箱を開けた。

第一章≪ハジマリ≫（後書き）

まだあらすじどおりに話が全然進んでない、と思っている方すいません。
２か３章ぐらいで話を進めますので・・・

第一章≪ヨカン≫

宝箱には何も入っていなかった。正直、かなり悔しかった。
「すごく残念でした。でも、それも宝探しの醍醐味のひとつでもあるんですよ。」
そうやって笑って言ってくれた。もしかして慰めてくれてんの？
「家は、この近くなので帰ります。では、ありがとうございました。」
そういって走ろうとしたとき気になっていたことを言う。
「ねえ。なんでこの近くにも家はあるのにわざわざこっちに来たの？」
すると、由紀ちゃんは微笑みながら振り向いてこう言った。
「なんとなく、です。」
そうして、走って消えていった。
「あっ、宝箱。」
まあいいか。これもよく見ると綺麗に装飾されている。これを宝にするか。そうやって満足して、家に帰った。ただいま、と返事をして着替え、二階にあがった。そして机に宝箱を飾った。今思うと由紀と名乗る少女は知らない人の帰りをまって、知らない人に掘るのを頼んだんだよな。そういうところはなんかすげーな、と思っていると、二階に俺の弟こと杉山　英二（中２）が上がってきた。
「なにこの宝箱！すげーな。どこでひろったの？」
「まあ、遊んでたらな。」
あれが遊びかどうかは定かではないが。そのあと勉強やら、テレビを見てたりしてたら、１０時半だった。両親に寝ることを告げ布団に入る。やっぱいいね。睡眠というのは。ずっとこうしていたい気分だな。そんなことを考えながら俺は寝た。
その日俺は夢を見た。みんなは夢の続きというのを見たことがあるだろうか。俺は今日見た。中一の時に見た夢の続きだ。当時の俺は

ファンタジーの世界に入ることに憧れていた。だからか、いつの時かは覚えていないが、ファンタジーの世界に入った夢を見た。夢の世界での俺は剣士だった。魔女を倒そうと男の剣士と、女の武道家をパーティーに旅にでて、俺は魔女に殺されそうになりそうなところで夢が覚めた。面白さと怖さで今まで、かすかに覚えていた。その夢の続きだ。夢の俺は死んでいた。二人はどうやら生きていたらしいが、魔女とその部下に街の住民を殺され続けているのを必死で守りながら逃げていた。けれど、その甲斐むなしく街の住民は全滅、二人も魔女に殺された。しかし、男は最後の魔法で魔女に気づかれず自分たち二人の魂を箱の中に封印した。という夢だ・・・ってあれ？この箱の形、宝箱となんか似てね？

「まさかな・・・」

そのあとも特に変わったことはなかった。鷹久は案の定クラスに早くも馴染み、クラスの男子ほとんどがすでに友達になったと言ってもいい。その中で3人、話が合う友達ができた。心配だった高校生活もなかなか早い段階で楽しい生活になりそうだ。なんてことを4月の後半に思い、勉強や、遊びを繰り返すうちに気づくと5月に入っていた。もうすぐ待ちに待ったGWだ。

第一章≪ヨカン≫（後書き）

もうすぐあらすじまでいけそうです。
長かった。

第一章≪シュウライ≫

今思えば前兆なんてのはなかった。あったとするならばそれはあの宝探しだけである。でもそんなのは日常にあるかどうかで聞かれると・・・まあ、あんましないけど、それでもこのせいで俺の日常が全壊、なんてのは想像しなかっただろう。そしてこの時の俺はこんな日に限って一人で帰っていた。

「よし、今日からゲーム三昧の５日間だ。」

なんて思いながら帰っていると、家の前に一人の女の人が立っていた。年は１６～１８ぐらいかな。いつかの由紀ちゃんみたいに突っ立ていた。その人は俺に気づいて、クスッっと笑った。

「ひさしぶりですね。お元気でしたか？」

まあそれなりに、なんて返事をしたが俺はこの人にあった記憶がない。俺が怪訝そうな顔をしていたからだろう。その人はそうか、と言ってこう言った。

「私は由紀です。驚かせましてすみません。」

そういってなんと、背が縮みやがった！

「由紀・・・ちゃん？」

はい、なんて元気な声で言って笑った。けどこの笑い方が不気味だった。目が全く笑っていないとゆうか、圧倒的に少女ではない気迫におされ、俺は本能的に一歩後ずさった。

「ふふ。気迫が感じられるということはやっぱりあなたは――――なんですね。」

な、、ん、て、言った、、ん、だ。とたんに強烈な頭痛がした。頭が割れるように痛い。痛い。痛い！

呻き声しかでない。視界がぼやける。なんだ、なんなんだ？そんな疑問も頭痛で掻き消える。

「あな――――は――――いのため――――よう――――――――いなん――――よ。」

分からない。聞こえない。喋れない。見えない。五感が、だんだん、くるって、、くる、、、、、、。
「兄貴！」
はっと我に返る。そこには英二が呆れた目をしながら立っていた。
「なにしてんの？兄貴。狂ったか？」
「いや、なんでもない。」
そんな生返事をして自分の部屋に入った。あのさっきまでの一瞬は夢でないことはこの残った頭痛が証明している。突然の年齢の変化、急な頭痛、そして聞こえない言葉。確かに非日常は望んだことはある。しかし、それはこんな痛みを有することじゃない。しかし、さっきのは由紀ちゃんなのかどうか、そしてなにしに来たのか。俺と由紀ちゃんをつないでいるのはあの箱だけじゃ・・・あの箱？っと思い
、机に飾ったあの箱を持った。中は空だ、とわかっているのに脳が開けろ、開けろと命じる。まるで中にナニカがあるのを知っているように。俺は震える手で箱を開けた。すると、箱が俺の右手に入り込むように消えた。
「なんだ？何が起こった？」
そして右手を見ると、手の甲に六芒星が書かれていた。いや、書かれていたというより、刻まれていた。すると、右手が勝手に動き、まるで目の前の壁を押している形になった。まるで、手のひらからナニカを放つように。すると手が光りを放ち、その光が人型になっていく。うそだろ？
「うわっ！」
その光は、男と女に分かれ、完全に、ヒトになった。
「うそだろ？」
こうして俺の１６年の長くて短い日常は、壊れた。

第一章≪シュウライ≫（後書き）

やっと第2章にいきます。

第二章≪カイマク≫

たった１０分ちょいあるかないかで自分の世界が大きく変わったなら読者諸君はどう思う？待ちにのぞんだ非日常を喜ぶか？それとも、不幸を嘆くか？俺は・・・

「夢か？」

現実逃避をした。たまにあるよね、夢と分かってて見る夢。

「夢ではありません。」

女のほうが俺の願いを壊してくれた。それにしても訳が分からない。由紀ちゃんの不気味なオーラ、急な頭痛、宝箱、手の紋章、そして・・・この２人。この短い間にいろいろなことが起こりすぎた。そんなことが顔に出ていたのか、男のほうが説明してくれた。

「俺らはこの国とは、別の世界から来た。」

「別の・・世界・・？」

「ああ。え～っと・・この世界では宇宙か。ここの技術はそんなに進んでいないが、俺たちの世界ではそれが３つくらい存在していることが確認されてるんだ。俺たちは別の宇宙からきたんだ。ここまではわかったか？」

とりあえずは分かったのでコクッっとうなずいた。それより英二が友達の家にいっていて助かった。急に部屋に入ったら女がいて驚くだけならまだいいほうだ。これが茶髪の長髪、端整な顔立ちに完璧とも呼べるスリーサイズな女に、赤髪の短髪、アニメの主人公のような整っていて、かっこいい顔、スラッとした体の男の二人。こんな２人を見たら気絶もんだと思うね。つうかよくこの状況で普通の態度でいられるな、俺。・・・話を戻そう。うなずいたら、男がホッとした顔になった。

「よし。こっからが本題だ。俺たちはな、契約者を探してたんだ。」

契約者？俺は背筋にヒヤッっとしたものがはしった。瞬間的に俺は右手を見た。六芒星・・・。

「そう。お前は契約したのさ。俺たちと。知らずのうちだろうけどな。・・ちなみに言うと解除方法なんてのはねえぞ。」
クッ！先を読まれていたか。しかし、
「でも、別に大丈夫だよ。忙しくなければ。」
「そうか。そりゃあよかった。」
実を言うとやっと待ちに待った非日常が発生してくれてとてもうれしかった。ぜったい叶わないと思っていたアニメやマンガの世界。それが今この俺に降りかかってくれている。今、俺の心はウキウキが６０％、不安４０％である。
「実は俺たち追われの身なんだ。もうすぐ来ると思う。」
ハッ？と言おうとした時には遅かった。ダダダダダダダ！！！！！という凄まじい音が聞こえ、家の壁が破壊された。するとその壁からＳＰと思しき格好をした男が３人出てきた。喋る前に俺の脳が本能的に告げた。逃げろ、と。俺は全速力で階段を降り、外へ出た。後ろから男達が追ってきた。すると、男の一人が、
「シュート」
と言った。すると、あの家の壁を壊した轟音が鳴り響いき、青色の槍が無数に地面に刺さって爆発した。その爆風に俺は、ものすごい勢いで転んだ。
「さあ。契約を解除いたしなさい。さもなければ短い生涯を終えることになるぞ。」
転んで頭が冷静になったのか、今の言葉が冗談でないことが分かる。そして、あの二人がいないことにも気づいた。おそらくつかまったか、逃げたか、俺の右手の六芒星に帰ったっぽいのかのどれかだろう。おそらく後者が正しいと思う。ああ、如実に俺は非日常の世界に飛び込んだんだなと思う。今、俺の心は不安８０％、ウキウキ２０％だよ。

第二章≪タタカイ≫

ＳＰの手がこちらに向いている。念じれば確実に半身が吹っ飛び短い生涯を終えることだろう。この場合やらなければならないことはこの契約を解除することだろう。しかし俺の心がいやだ、と言っている。たぶんやっと訪れた非日常を捨てたくないのだろう。てゆうか、あいつはねえ、て言ったんだがありゃうそか？

「さあ、解除をしろ。念じればできる」

ＳＰが急かす。勝算なんて・・・ない。だって俺は能力もくそもないからな。解除しなければならないのか？そう思っているとドン、と後ろからあの女にＳＰがホールドされた。どうやら、俺の予想は外れたようだ。

「おねがい・・！私の名前を・・読んで！！」

あんたの名前・・・なん・・て・・・。するとまた頭痛がした。頭が知ってる。あいつの名前は・・・。

「ルシ・アクト・・・？」

ＯＫ．Ｏｐｅｎ．そんな音がし、ルシが笑った。

「よし。これで力がだせる！！」

「ちっ！遅かったか！」

とＳＰが焦った声で呟いた。するとあのＳＰみたいなのの２人目があの男のほうを突き飛ばした。こっちの名前も知ってる。

「イラ・フィレス」

するとまたＯＫ．Ｏｐｅｎ．と聞こえ、イラは消えた。と思った時にはＳＰの一人の顔面を殴って、およそ２ｍくらい吹っ飛ばした。人間業じゃない。ぐおっ！と男の声が聞こえて振り返ると、ＳＰがルシにみぞおちを殴られバタッっと倒れた。これ、実質タイム５秒もなかったな。するとＳＰの二人はパリンっと音が鳴って煙になり、消えた。

「つまり、名前を呼ぶことで契約が完全完了したと？」
いまは、おれの部屋にまたいる。壁はなんかしらないがルシが直した・・・らしい。そんでさっきの話の続きをしている、ということだ。
「ああ。もうこれで、おまえが死ぬまで解除は不可能だ。」
「本当にごめんなさい。まきこんでしまって。」
まあいいんだけどさ、なんてことを言い別の話題に移ることにした。
「追われてるってどういうことだ？」
するとルシが、
「はい。まずは・・私たち実は別の世界・・・まあフィリアスと呼んでいますけどそこの少ない生き残りなんです。フィリアスは高度の力や技術があり、他の惑星よりはるかに強力な権力があったんです。しかし、そこに目をつけた惑星デダイと私たちの国の王様の側近が手を組んで、この惑星を乗っ取ることにしたんです。戦ったけれど結局破れ、今ではこのフィリアスの住民は１０人いるかいないかになってしまったのです。そこでデダイの人達は生き残りがいつかこの世界の脅威になるのではないかと恐怖し、私たちを殺そうとしていたんです。ちなみに私達は、フィリアスの技術で契約という形で生きているのです。簡単に言うと私達は、幽霊ですね。」
「というわけだ。改めて頼む。俺達と契約してくれないか」
と、非日常ワードを連発されて俺は頭がパンパンだ。どうせ、解除できないし・・
「いいぜ。ただ、危なっかしくなったら頼むな。」
「おお。そんときゃ任せてくれ。」
と、イラと握手した。と感動・友情的ことをやっていると、弟の足音が聞こえてきた。そういえばいまが８時だということに気づいた。やばい！来る！そう思い急いで
「見つかるとまずい！はやく手に戻れ！！」
「「・・どうやって？」」

と、二人の声がだぶる。まじ？できないの？と思い視線を後ろにそらすと・・・英二が突っ立っていた。無音の空間が広がり、しばらくして英二がUターンし走りながら、
「お母さーーーん！知らない二人がいるーーー！！！」
「それを言うんじゃねえええええええええええええええ！！！！」

というわけで後で父さんも巻き込んでの大騒動がおき、顔を真っ赤にして力説をした。最終的に友達がしばらく泊まる、で落ち着いた。ちなみに二人の偽名はルシが「神崎　優華」、イラは「江藤　龍太」になった。今後俺もこっちの方がいいやすいのでこっちで言うことにする。とにかく大変な一日だったぜ。俺はこんなことしか考えていなく、忘れていた。そう、あの１５～１６の由紀ちゃんのことを。

第二章≪タタカイ≫（後書き）

いまさらですが、キーワードに恋愛と書いておきながらいまのところ一切出てきてないうえに、説明に『９０％が恋愛』でキーワードに書けると書いてあるのを素っ飛ばし、軽々しくキーワードに書いてしまいました。なので、ここで正式的な比を表すと、恋愛2、学園3、バトル5です。恋愛に期待した人、すみませんでした。

第二章≪ニチジョウA≫

あんなことがあったのに、家の中は落ち着いていた。（優華のことは恋人だと勘違いされたが）親は友達が家に上がるのは鷹久以来だったから、新しい友達ができてうれしかったのだろう。幸い部屋は広いので、優華達は食住に困らなかった。問題は衣服だった。二人の着替えは当然というか、０だった。

俺の服やらがあったり、女物を買ってこさせたりでなんとかなった（ちなみに俺は服代で金がなくなった）。しかし学校友達というからには登校しなければならない。男の学生服はあるのだけれど、当然セーラー服はもってないし、買うお金もない。

「どうしよう・・・。」

言ってみたが解決できるわけがない。いや、正確には・・・・方法があることにはある。隣の愛華に頼み込めばなんとかなるだろう。しかし、そんなことをすれば俺は変態扱いだし、家にいる2人の正体を告げることはできない。いや、待て。親戚だと告げれば貸してくれるかも・・・・。そう思い立ったので、早速行ってみた。

「すみません。杉山ですが、愛華さんはいませんか。」

向こうから階段を下りる音がする。うう、けっこう緊張するな。なんて考えていると扉が開いた。

「おお。私になにか用か？」

こいつこそ遠藤　愛華。俺と同じ高1で同じ学校の腐れ縁である。ブラックのショートカットに、前髪をアクセサリで留めており、身長も女子平均よりも高く、まあなんというか「えっ、バスケ部？」みたいな雰囲気をかもし出している活発なヤツである。そして、

「よう。おまえ俺に無駄な仕事おしつけてきやがったよなあ」

俺を非日常へ誘った張本人である。まあ本人に自覚はないが。

「あはは。昔から子供の面倒はわたしよりうまかったからね、つい」

まったく謝った感じがない気がするのは俺の気のせいかな。

「まあいいや。用っていうのはさ、俺の家に親戚が2人来たんだ。そんで転校してこっちの学校に来るんだけどさ。えと、」
うわあああああ。緊張する。やばい。落ち着け！
「あの、そいつこの学校の制服なくて、少しの間お前の制服貸してくれ！頼む。」
すると、そこには顔を輝かせた愛華がいるではありませんか。
「マジ？！すごい！どこにいるの？」
愛華が俺の手を上下に振る。クッ、返せ！俺の心を落ち着かせた時間を返せ！ってまあそうこうしているうちに制服は余裕で手に入った。

夜、杉山邸2階慎一の部屋にて、
「ふう。なんとか、そろったな。これで、学校に行けるぜ」
「学校ですか。ひさしぶりですね。」
「いかなきゃなんねーのか？学校に」
「そりゃそうだろ。行かないとこの家にすめねーぞ。それに周りを見るうちに仲間が見つかるかもしれないだろ？」
そうやって話している内に１０：００になり寝る時間となった。優華は部屋を出た。俺の隣の空き部屋に寝ることになったからだ。（ちなみに昨日は俺の部屋で寝るかでもめ、母にいさめられた）こうして、平和な一日が終わった。ＧＷはあと3日だな、と思いながらベッドに体を預けた。すると、隣に布団を敷いてくつろいでいる龍太が俺に俺にしか聞こえない声で喋りかけてきた。
「俺らはさ、戦いで学校がいけなくなってさ、クラスメイトも全員殺されたんだよな。」
「・・・ああ。なんとなく分かってたけどな。だから行きたくねーのか？」
なんとなく、２人が目の前で親友を殺されてしまった光景を想像した。
「いや。それはただ単にめんどくせーだけだけどよ。・・・行った

ら俺はお前のクラスメイト、いや、学校の人間全員を巻き込んじまうような気がするんだよな。」
こいつなりにいろいろと考えているんだろう。そして隣のあいつも。そして俺だって。・・・例えばクラスに急に由紀ちゃんが来て、クラスのみんなを、殺そうと・・・・いや、考えるのを止めておこう。
「だいじょうぶだろ。あのＳＰみたいなやつだってさすがに見られたらマズイだろ？それに、動くことをやめてしまったらなにも始まらない。だろ？」
「・・・。ああ。そうだな。そうだよな。じゃあ、行くか。学校に。」
「それよりお前学校の勉強についていけるのか？」
「はっ！日本より何年技術が進化してると思ってるんだよ。教科書見てみたけど、あんなのは俺らは中２で習ったぜ？」
こんなことを会話して、俺らは眠りについた。

俺らは気づかなかった。いや、気づいてはいた。でも気づきたくなかったのだろう。このままなにも起こらなかったら、これは非日常ではない。非日常はドミノのように連鎖するのだ。俺は好奇心で最初の一つ目を押してしまった。あとは、ゴールをするか、それともミスして途中でストップするか。それだけ。でも、巻き込む数は変わる。俺は、１つのピースで２つを押し、その二つも二つを押し、四つが八つを、八つは十六個を、三二個を・・・・・。そして俺は気づけば俺はこの町全部を巻き込んでいた。
だがこの時の俺は危機感なんて微塵も感じなかった。

第二章≪ニチジョウA≫（後書き）

久しぶりに出しました。
受験勉強で忙しかった。
急いで書いたので、間違えた文字があったら言って下さい。
よろしくお願いします。

第二章≪ニチジョウB≫

予想以上にクラスに2人は溶け込んだらしい。本当は2人も高校で転校してくることが異例なんだけどね。らしいというのは、優華は違うクラスになったから帰った後に聞いたからだ。龍太はこっちのクラスになった。龍太は顔がもともとかなりイケメンなので、男子も女子もすぐに話しかけてくれて友達になってくれたようだ。俺はというと、黒板を見ながらボーっとしていた。いやあ、これは急に来たクラスの人気者に嫉妬している一般人みたい・・・いや、違うけど。

「いやー、君たちはめずらしいね。兄弟かい？」

下校時に鷹久が優華達に話しかけてきた。当然俺達は同じ道で帰る。

「うん。兄弟だよ。慎一の従兄妹にあたるね。」

もちろん俺が刷り込んだウソである。

「へえ。お前にこんなすごい従兄妹がいたなんてな。正直、驚いた。」

「悪かったな。俺だけ普通で。」

「はっ！まったくだ。全然似てねーな。・・・じゃあなー3人とも。」

「「「「おう（はい）。」」」」

こうして俺達は鷹久と別れ、自分の家に帰った。

「「「ただいま」」」

「はい。おかえり。転校初日はどうだった？友達作れそう？ふふっ、あなたたちならすぐ作ることができそうね。」

「はい。おかげさまで、いい学校生活が送れそうです。」

こんな会話をしていると、だんだんと非日常が日常に溶けてゆく、そんな感じがしてとてもほほえましく感じる。・・・でもなんでだろう。この胸にチクッとくるこの感覚は。心のそこでは悲しんでいるような感覚。これではまるで俺がこの前のような戦いを望んでい

るようではないか。俺はどっちを望んでいるんだろう。日常か非日常なのか？チッ、考えても無駄だ、やめやめ。なにポエムみたいなことを心のなか言ってんだよ。俺は学生鞄を玄関において二階に上がった。このあと俺は宿題をやって、ご飯たべて、寝た。そんなループのような日常が１週間続いた。ＧＷの時と変わらない日常。起きた変化は大きいようでとても小さかった。でもその小さな変化が、新しい友達を２人もつくってくれた。

もう、十分だろ？

そんなことを思えるようになった。そうだよ、これ以上なにを望むんだ。それはおこがましいってもんだ。ループのような日常のなかでのあまり変化しない非日常。これが俺の望むとても良い状態だ。だからかあいつらもそれがいいのかな？と思うようになり、最近は優華も友達を作って遊びに行ったり、龍太も使命をあまり考えずに普通に外を出歩いたりするようになった。

・

・　・　・　・

だが、それも終わった。前も言った通り、動き出したドミノは止まらないのだ。少しの非日常はこの日でいったん終わり。明日、非日常が、起こる。

第二章≪サイカイ≫

「おひさしぶりですね、慎一さん。」
突然だった。特に変わらなかった。いつものように起き、いつものように朝食をたべ、いつものように登校していると、道の真ん中に・・・大人の由紀ちゃんが待ち伏せしていた。
「ふふ、てっきりあの箱はフェイクだとおもってましたからね。まさかこんなことになってしまったなんて思いませんでしたよ。ごく一般的な人間には危害をくわえないつもりでしたのに。どうやら巻き込んでしまいそうです・・・ねぇ、慎一さんそう思いませんか？」
「！！・・・あのさ、どうでもいいかどうかしんないんだけど、今までをふりかえってみると、由紀ちゃんってその、なんてゆうの？こいつらの言う敵・・・みたいなもの？」
「さあ？慎一さんがどっちについているのか解りませんから。でも、その二人についているというのなら、あなたの敵ということになります。」
「へ、へえ。そうなんだ。じゃあ質問なんだけどあのＳＰみたいな人って・・・由紀ちゃんの仲間？」
「はい。わたしの仲間の式神です。ああ、ちなみに慎一さんが質問したいことをさきに言っておきますけど。２回目に慎一さんの家に行った時殺さなかったのは、私達の仲間になってくださる可能性があったからです。私にも上の人がいまして、あまり失態は晒したくないんですよ。殺してしまったら反省レポートを提出ですから。」
いままでたまっていた疑問がすうっと抜けていった。・・・つか、俺もいろんなことがありすぎて冷静に対応できるな。たぶん今日は、
「さて、慎一さん、あなたには死んでもらいます。わたしも上の命令ですので、逆らえないんです。ああ、だいじょうぶですよ。慎一さんの関係者には記憶操作であなたが元々いなかったことにしておきますから。市役所にも手を回すんですからたいへんでしたよ。で

も、おかげで慎一さんは1週間近く延命することができました。」
一歩、一歩と由紀ちゃんが近づいてくる。まさかここまでとは思わなかった。さすがに俺も殺人犯に近づかれたら冷静ではいられないが、あのＳＰとの経験がおれの精神を強くしてくれたようだ。・・・やはりこれは戦うのか？
「慎一さん、逃げてください。ここは私達だけでなんとか食い止めます。そのうちに！」
「ああ。男だから逃げねえとかそんなこと考えないで逃げろ。」
「ふふっ。私がまさか逃がすようなまねをすると思うんですか？」
俺らはちょうど十字路の真ん中に立っていて、前に由紀ちゃん。そして左右と後ろにはＳＰがぎっしり立っている。つまり、俺達は囲まれてしまったようだ。これでは俺は逃げようにも逃げることができない。・・・でもちょうどいいか。これで俺も活躍できんだから。ああ、やっぱ体の底では求めていたんだな。戦いを。非日常を。
「じゃあ戦うしかねえよな。優華、龍太。」
「くっ、この状況ではたしかにおまえをたおらなければ、勝てん。・・・たのんだぞ、慎一。」
「ああ。いくぜ。イラ・フィレス、ルシ・アクト！！！」
そういって二人の封印を解いた。この一週間少し試しに封印を解いてみて、気づいたことがある。どうやら封印を解くと俺らは精神的なにかが繋がるらしい、ということが分かった。例えば、相手の心の中が多少分かったり、俺も身体能力が向上する。どうやら二人の力が少しだけ流れ込んでるらしい。まあ、四字熟語で言うなら一心同体ってやつかな。つまり俺も多少なりとも戦闘に参加できるってことだ。
「殺すのは慎一さんだけです。残りの二人は確保してください。では作戦を開始します。」
そういって一斉にＳＰたちが襲ってきた。由紀ちゃんは動かない。
「フッ！！セッ！だあああああ！！！！！・・・優華！慎一の守りに徹してくれないか？」

「やあああああ！！！そうっ・・・ねっ！できるかぎりがんばるけどっ！数が多すぎる。」
「俺は少し守ってくれれば、いい！！！二人は戦いのことをできるだけかんがえて！！」
次々とＳＰが消え、そのたびに煙があがる。その煙の中からＳＰが現れる。倒す。殴られる。よける。そのくりかえし。気づけば俺は制服のボタンも千切れ、顔や腕などにはあざができていた。身体能力が向上しているので痛みは薄いがそれでもなんども本気のグーをもらっていると、恐怖などがこみ上げてくる。でも俺はそれを押し殺し、俺もグーを出す。俺は死の恐怖よりも、二人より劣り、足手まといになる恐怖のほうが怖いんだろう。
「はあ・・・はあ・・・」
息が荒くなる。いくら単調な攻撃とはいえ、数が圧倒的に不利。今の俺達の実力だけではどうしようもない決定的な差がある。
「がああっっっっ！！！！」
みぞおちを叩かれた。体から酸素がなくなってくるのが分かる。
「慎一さん！今そっちに・・・きゃあ！！」
優華が俺を向いてる隙にＳＰたちが顔面を殴りつける。転んだ隙にＳＰ達が１０人がかりで優華をつかみにかかる。それをすぐに龍太がＳＰを殴り、引っぺがす。
「慎一！！たのむ。手伝ってくれ！！」
龍太が俺を呼ぶ。俺はその問いに・・・答えられない。俺のまわりにＳＰたちが囲んでいるからだ。
それでも俺はもがいて龍太のもとにたどり着く、が、ＳＰ達も俺といっしょについてくる。ＳＰが俺達を殴ろうと手をだす。その瞬間優華がなんらかの方法で３６０度を囲むシールドを出す。そのシールドをＳＰを殴り、シールドが割れ、破裂する。その爆発で俺達はふっとび、後方に弾かれる。そこは、さきほどまで由紀ちゃんがたっていたところだったが現在帰ったのか、由紀ちゃんはいないので後ろに退路ができた。ＳＰ達も爆発で結構飛ばされてしりもちをし

てドミノ倒しになってなかなか立てないでいる。そのあいだに呼吸で酸素をたくさん摂取する。脳の回転率を上げ、心臓の鼓動を平常にさせる。隣の龍太と優華を見る。二人とも制服がボロボロになっていているがあざがあまり俺と違ってない。体の構造が違うのだろう。優華はちょっとブラなどが見えてしまっているが、俺は恐怖や疲れでなにも感じなかった。せいぜい視線をそらしたぐらいか。

「はあぁ・・・はあ・・・・これはちょっとやばいな。おい、慎一。だいじょうぶか？最初の日に、はあ、約束したのにな。」

「はは・・・今、めちゃくちゃ、はあ、はあ、危ない、状況、なんだけどな。」

やべえ、めまいがしてきた。やっぱり疲れが回復しねえ。くらくらする。

「おい・・・・いち！・・・・しっかり・・ろ！」

眠い。やばい。起きようと・・・・思ってるのに・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・オ

キ・・・・・・テ・・・・・。

―えっ・・・・。だれ・・・・・・・・・？―

キミハマダミカンセイナンダ。サア、カクセイシテ。キミニハカクサレタノウリョクガアル。

―えっ？隠された・・・能力？―

ソウ。ケイヤクシャノノウリョク。カレラモマダシラナイホントウノキミノイミ。

確かにそうだった。俺は二人に比べて弱い。なら契約する意味がない。最初は、生きるためかと思ったがそれだったら契約する前に喋っていた説明にならない。なら、俺は、なんのために・・・。
ソウダ。サア、トナエテ。マズハオキテ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・はっ！
「だいじょうぶだ。すこし、くらくらしただけだ。」
どうやら数秒もたってなかったらしい。
「そうか、逃げるぞ。ここは戦力的撤退だ。」
「いや、そうするとやつらは俺の部屋に侵入するだろう。そうなるとやばい。ここで、倒す！」
態勢をととのえたＳＰたちが走る。
「いくぜ。優華、龍太。これが俺の技だ。フルオープン・フュージョン！！」
「まさか、おまえもう・・・！！！」
「えっ！まさか・・・！・・きゃ！」
俺らはひかりとなって磁石のように引き合い、そして、合体した。
「これが俺達のフュージョン。・・・イリアスだ・・・！！」

第二章≪サイカイ≫（後書き）

今回は長めになりました。誤字・脱字があったら報告おねがいします。

第二章≪VS．ユキ≫

体に力がみなぎる。まさか合体とはおもわなかったけどな。
「ハッ・・・・・！！！」
知らないうちに持っていた俺の身長とほぼ同じ長さの大剣を軽々と振り回す。その筋力ははるかに俺の筋力を凌駕していた。今の俺は鉛筆を投げる気持ちでこの大剣を振りまわせる！！！！！一気に何十体ものＳＰをふっとばし、消してゆく。残りも躊躇しているうちに斬る！
「おせええええ！！！！！」
動きが緩慢に見える。
―それより、合体とは思わなかったですね。正直私も驚いています。―
―ああ。それよりこれは心の中で通信ができるみたいだな―
心の中での通信って不思議な感じだな。なんか心臓にいる小さな人が喋ってるような感じだ。
―っつーより、表での行動は慎一なんだな。どうだ？大丈夫そうか？―
ああ。すごい。すっごい気持ち良い！背中に羽が生えた感じだぜ。
気づくと俺はＳＰたちを全員倒していた。そして、俺の目の前には、
「ふふふ。そうですか。これが慎一さんの力ですか。倉庫にもデータがありませんでしたよ？」
大人の由紀ちゃんがいた。
「由紀ちゃん。これ以上俺や二人に手を出すなら、いや、知り合いに手を出すつもりならしかたがないけど、君を倒さなきゃいけない。」
「優しいですね。慎一さんは・・・。でもこれは上からの命令なのです。私もあなたを殺すのは心苦しいですが・・あ、これは本心ですよ。・・しかし、逆らうわけにはいかないんです。・・・ですの

で、あなた方も手加減しなくて良いですよ。」
ーいくしかねーんだよ、慎一。お前の心の乱れがわかるぞ。ー
ああ。分かってる。でも、くそ！ＳＰの時は大丈夫だったのに！いざ、人かもって考えると足がすくむ。簡単にいっちゃえば俺はいま人殺しをしようとしている。だめだ。考えるとさらに足がすくむ。
「ふふっ。だめですよ。躊躇しちゃ。そんなんじゃ私には勝てませんし、たとえ勝てたとして私の上が襲ってきた時に精神が壊れてしまいますよ。・・・では、行きます！」
由紀ちゃんが走る。速い！ＳＰなんかとは比べ物にならねー。
「っぶねっ！」
大剣を盾にし、由紀ちゃんのパンチを防ぐ。
「甘いです。そんなんで・・・・・・」
由紀ちゃんが後ろにバックする。
「防いだ気になってます？」
ドンッ！！！！
「ぐあっ・・・・・！！！？」
急に衝撃がきた。力が倍増してるはずなのに、それでも来る衝撃。もし、生身の俺だったらやばかったかもしれない。でもっ・・・・！
「そんなんじゃ、きっ・・かねええ！！」
大剣を振る。その時俺に水飛沫がかかった。・・・水？
ーそうか。彼女の能力はおそらく水です。ー
ーああ。やつは水を自在に操るんだろうな。水は使いようによってはレンガをらくらく貫通できるほどの威力を持ってるからな。ー
そうなると、威力だけじゃなくて、速さも速いな。
「私の水から避けられるとでも思ってるのですか？」
今気づいた。どうして、ここに由紀ちゃんを派遣したのかを。
ーちっ！やばいな。この一帯は水量が多い。水を操るのに最適な場所だなー
水がマンホールから、隣の店から、俺めがけて走ってく。見ようによっては何体もの蛇が襲ってるように見える。

「っ！ふっ！ほっ！」
それを上がった動体視力でかわす。
―そろそろ覚悟をしろ。このままだったらお前が死ぬ。―
もうだめだった。躊躇をしてられない状況に俺は置かれてる。場合によっては俺だけじゃなくて優華達も死ぬ可能性があるのだ。そんなんだったら俺は、まだ見知ったばかりの由紀ちゃんよりも、友達を選ぶ！
「だあああああ！！」
ダッシュで由紀ちゃんのほうへ走る。
「死んでください！」
だが、それが分かっていた由紀ちゃんは、俺の道を最初から誘導していて、俺の真正面に水の蛇をだす。・・・水が俺の全身を包む。
「っっ・・・・だっ・・・・！」
ものすごい衝撃がきた。まるで大木で殴られたような感じ。
でも、それでも俺はあえて進んだ。そうしないと進めないことが分かってたから。足を・・・・踏ん張る！そしてまだあっちは俺を全身包んでいるので、俺が立っていることに気づいていない！慎重に、でも踏ん張って前に進む！そして・・・・、由紀ちゃんの手をつかむ！そして水の流れは止まった。
「・・・っ！！！！」
「つ・・・かまえ・・・たっ！」
そして俺は由紀ちゃんのみぞに・・・大剣を振る！！
「そんなっ・・！」
ドッ・・・！！という鈍い音がした。
―どうして、峰打ちなんだよっ！―
殺せなかった。出合って間もないうえに、殺人未遂のことをしようとしたけれど、やはりだれであろうと、人を殺すことなんて・・・俺には、できない。
―また襲ってくるかもしんないんだぞ！―
―やっぱりだめだよ。慎一さんに人を殺すことをおしえちゃ、だめ―

ごめん。やっぱり怖いよ。人を殺すなんて。なんとか平和に解決できないかな。
ーハア、お前はやっぱどちらかというと優しい部類に入るよな。ーなんで、どちらかというと、なんだよ。俺は超優しい部類だよ。
ーふふ。でも戦闘では、生き生きしてましたけどね。私達は今あなたの心の感情が読めるから分かりますよー
そんな会話をして若干空気が和んでいると急に体から煙がでて、急にどれかに押されるような感覚になり、俺らはまた3人に戻った。
くそ、やっぱこういうのって時間を計測しておけばよかったかな。
「で、どうするんだ。こいつは。お前が殺せないなら俺が殺すぜ？」
そうして、龍太が由紀ちゃんを指さした。
「ちょっと！やめてくれ。由紀ちゃんを殺さないでくれ！」
俺自身もなんでなのかわかんないけど、由紀ちゃんを殺してほしくない、という気持ちが強くなっていた。たぶん、死線をくぐりぬけることで、人としての情がでたのだろう。
「甘いんだよ！今度はお前の母が死ぬかもしれないんだぞ！」
「そしたら！そしたら、俺が、俺がけじめをつける！」
「・・・・っ！わかった。契約者の言ったことだからな。・・・従うことにする。」
そして龍太はどこかへ歩いていった。
「あ・・・！待って！・・・・でもっ・！」
俺と龍太を交互に見る。どちらにいようか迷ってるんだろう。
「ああ。いいよ。こっちはだいじょうぶだから、龍太のことたのんでいいかな？」
「いいんですか・・・？危険なんじゃ？」
「大丈夫だよ。心配しないで。」
「・・・そうですか。・・、では気をつけてくださいね。」
そうして、龍太のほうへ走っていった。そして、呼吸と空気の音しかしなくなる。静かだった。
悪いと思いながらも、近くにあった薬局屋で冷えピタをくすねて気

絶した由紀ちゃんのおでこにはる。
落ち着いてみると、周りの商店街はぼろぼろになっていた。今行った薬局屋だって倒れている棚とかあったり壁がはがれたりしていた。コンクリートもさっきの由紀ちゃんの力とかでえぐれていたりしていた。
・・・・こうして、何分経ったか分からないが、由紀ちゃんが目覚めるのを待っていたら、ゆっくりと、由紀ちゃんが目覚め始めた。
「う・・・・ん・・・・」
「ああ、目が覚めた？どう？どっか痛くない？」
跳ね起きるとおもっていたが、案外ダメージが深かったのか俺の近くから離れなかった。
「そうですか・・・・。私は負けたんですね？」
「うん。そだよ。」
「・・・私を殺さないんですか？」
由紀ちゃんがゆっくり起き上がる。おとなしい目つきだった。
「あたりまえじゃん。どこに好きで殺しする一般の高校生がいるわけ？」
「それも・・・そうですね。」
そのまま、ゆっくりと由紀ちゃんは帰っていく。その背中になにか感じたので、由紀ちゃんに伝えた。
「ねえ。あのさ、こんなこと言うのはおかしいけど・・・。こっちのほうが居心地いいよ？いつでも来てくれよ？」
ピタッ、と一瞬止まった。
「そうですね。」
それだけ言うと、去って行った。なんかさっきまで死闘を繰り広げていたのに、笑ってしまった。
俺には、由紀ちゃんが本当はいいやつなような気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4629i/

３つの魂

2010年10月8日11時28分発行